特集：うるま市の沖縄戦

戦争の悲惨さを忘れない

～うるま市の主な戦争遺跡～

戦後72年。時の経過とともに、戦争体験者の数も少なくなり、戦争を知らない世代が増えた。

わたしたちは、戦争の歴史を風化させないために、悲惨な戦争の歴史を後世に伝える役割があるのではないか。

県内各地の沖縄戦の様子はよく耳にするが、うるま市の状況はどうだったのだろう。

今回の特集では、うるま市の戦争遺跡をとおして、あらためて「平和」について考えてみたい。

うるま市の戦争遺跡マップ

7 与那城監視哨跡（よなしろかんししょうあと）

与那城監視哨は、航空機を早期に発見し、敵味方を区別して防空機関に知らせるための施設で、屋慶名のイシマシムイの丘上にあります。正八角形のコンクリート製で、入口以外の7つの壁面にはひとつずつ窓枠があり、360度見渡せる構造になっています。外側の窓枠から下の部分は土に埋まっています。

この監視哨が最初に出来たのは1938（昭和13）年頃で、簡単な作りで、その後、1943（昭和18）年にコンクリート製に建て替えられたようです。

1944（昭和19）年10月10日の空襲（十・十空襲）では、敵機来襲を最初に発見したとして、当時の泉沖縄県知事から感謝状が贈られたそうです。

壁面には沖縄戦当時銃撃を受けたときの弾痕が今でも残っています。

6 平敷屋の高射砲陣地（へしきや こしゃほうじんち）

平敷屋平原の高射砲陣地は石部隊がつくったといわれています。

1944（昭和19）年、石部隊は近くに野営をしながら陣地を構築しました。中城湾を見下ろす断崖 の山林の中には、コンクリートを使った円形の石積みと弾倉3個も残っています。

高射砲は円形になった石積みの中心あたりに設置されたといいます。

8 新川・クボウグスク周辺の陣地壕群（あらかわ しゅうへん じんちごうぐん）（市指定文化財・史跡）

陣地壕群は、津堅島の最南端に位置する新川グスクやクボウグスク（御嶽）が立地する岩山を利用して構築されています。

沖縄戦で旧勝連町内唯一の激戦地となったこの陣地壕群は、現在でも、戦争の歴史と軍事上の要塞などをを知るうえで貴重な戦争遺跡です。